

# 甲第70号証

## 京大側、棄却求める

### 遺骨返還訴訟 所有権が争点に

戦前に旧京都帝国大学の人類学者が今帰仁村の百按司墓から26体の遺骨を持ち去ったとして、琉球民族遺骨返還研究会代表で龍谷大学の松島泰勝教授や第一尚氏の子孫ら5人が京大

に遺骨返還と原告1人当たり10万円の慰謝料を求めた訴訟の第1回口頭弁論が8日、京都地裁（増森珠美裁判長）であった。京大側は請求の棄却を求め、争う姿勢を示した。

同墓と関係があるとされる第一尚氏の子孫として原告となった亀谷正子さんが琉装姿で意見陳述した。京大が遺骨返還を拒否したことは「植民地主義の表れ」と指摘。「琉球・沖縄の人々は日常的に先祖の霊と密に交流しており、遺骨・骨神の存在が不可欠」として、一日も早い遺骨の返還を求めた。京大側は答弁書で一部の

遺骨の保管を認め、人骨の収集は「当時の県庁や警察を通じた手続きを経て行われた」と主張。遺骨と原告とのつながりを具体的に立証するよう求めた。琉球人の遺骨を巡る返還訴訟は初とみられ、原告らが「祭祀継承者」として遺骨の所有権を有しているかが争点となる。

国から多くの人が集まり、社会的関心の高さがうかがえた」と強調。「遺骨の持ち出しは一部の人の了解しか得ていない。今後、証拠を集め、京大側の主張に反論していく」と述べた。

裁判後、松島教授は「全